

2019年10月30日

## 大嘗祭と大嘗宮そしてその装い

学習院女子大学名誉教授 増田 美子

新天皇即位に当たって、大嘗祭(だいじょうさい。おおにえのまつり)が11月14日夕刻から15日未明にかけて行われる予定である<sup>註1</sup>。毎年11月23日(本来は中の卯の日)には、天皇がその年の収穫に感謝して天神地祇(てんじんちぎ。天の神・国の神)を祭る宮中行事としての新嘗祭(にいなめさい)が行われているが、大嘗祭は天皇が即位後最初に天神地祇を祭る大規模な新嘗祭である。「大嘗」は「大新嘗(おおにいなめ)」の略との説が有力であり、古くは「踐祚大嘗祭(せんそだいじょうさい。踐祚は天皇の即位のこと)」と称されていた。

古代においては、「政事」を「まつりごと」と称していたように、大王(おおきみ。7世紀頃から天皇の称)の重要な役目の一つに「神まつり」があったのである。

本稿は令和の大嘗祭に関して現時点でわかる範囲でのものを記していくが、不明の部分は、平成の大嘗祭で補うとともに、平安前期の史料である『儀式』(正式には『貞観儀式』、9世紀末撰上)・『延喜式』(927年撰上)・『江家次第』(大江匡房著、1111年頃)・『兵範記』(平信範の日記。12世紀半)の記述を参考にして記すこととする。

### 1. 大嘗祭の歴史

大嘗祭の文言の初見は、『日本書紀』清寧天皇二年条の「冬十一月、大嘗供奉(たてまつ)る料に依り」(清寧天皇が実在とすれば5世紀末)である。しかしその後の書紀の記述でも大嘗祭と新嘗祭の区別は曖昧であり、この「大嘗」は新嘗祭のことではないかとされている。書紀で大嘗祭と新嘗祭が区別されて記されるようになるのは、天武天皇の時(7世紀後半)以降の可能性が大きい。大宝令(701年成立)・養老令(718年成立)の衣服令では、「大祀・大嘗・元日則ち之を服せ」と、大礼服である「礼服(らいふく)」着用の場として「大嘗」の名が見え、大礼として大嘗祭が行われていたことがうかがえる。日本の国家体制・律令体制整備の過程で確立した行事とあってよいであろう。

平安前期の『儀式』『延喜式』には、「踐祚大嘗祭」の祭儀が詳細に記されており、重要な行事であったことがうかがえる。そしてこれらの書に記されている内容が以降の大嘗祭儀式の基本形となった。

大嘗祭は鎌倉時代以降も継承されたが、戦国時代の後柏原天皇(1500~26)から江戸前期の零元天皇(1663~87)までの9代の期間は中断している。貞享4年(1687)、東山天皇即位の時に復興され、その記録『大嘗會之図』などが伝わっている。しかし次の中御門天皇の時は行われなかった。50年の中断の後、元文3年(1738)、桜町天皇の即位の時に徳川吉宗の援助により復興され、今日に及んでいる。

### 2. 大嘗祭の神事日程

- ① 2019年5月13日、悠忌(ゆき)・主基(すき)の斎田点定(てんじょう)：アオウミガメの甲羅による卜定(ぼくじょう)により、令和の悠忌国は栃木県、主基国は京都府と決定(平成の時は、悠忌国は秋田県、主基国は大分県)。
- ② 2019年7月26日、大嘗宮(だいじょうきゅう)の地鎮祭を皇居東御苑で実施。清水建設が請け負う。
- ③ 2019年9月27日、斎田抜穂の儀：栃木県、京都府のそれぞれの田で、烏帽子(えぼし)・白張(は

くちょう。白麻製の狩衣)に身を固めた大田主(耕作者)たちによる収穫の儀が行われた。

- ④ 白酒(しろき)・黒酒(くろき)<sup>註2</sup>の醸造：最初に収穫した4束は御飯(みい。神の御飯)とし、そのほかの米で白酒・黒酒を醸造(平成の時は、造酒童女6名が醸造に携わった)。白酒は醸造したままの白い酒。黒酒は『儀式』では、白酒に臭木(くさぎ。根は薬草)を焼いた灰を加えるとなっている。一時期黒胡麻を入れたこともあったが、平成の時も臭木の灰を混ぜて造られた。

- ⑤ 2019年10月～11月 御贄(にえ。神に奉る食べ物)の調備、神服の調製：大嘗宮の神座(かみくら)には神服として、麤服(あらたえ。麤妙。大麻製)と絵服(にぎたえ。和妙。絹製)が供される(図4)。伝統的に、麤服は阿波国(徳島県)で絵服は三河国(愛知県)で調製されてきた。

麤服：今年は、4月9日に阿波の忌部(いんべ)氏の子孫の手により、種がまかれた。収穫の後、8月に初紡式があり、徳島県吉野市山崎忌部神社で織り上げられた(平成の時には4人の織女が白小袖・白千早・緋袴姿で携わっている)。

絵服：愛知県豊田市稲武地区で織られ、10月2日に出発して3日に宮内庁に納められた。

- ⑥ 2019年10月15日 悠忌・主基両地方新穀供納の儀：栃木県・京都府の太田主たちが齋田から辛櫃(からびつ)に入れた米を運び、大嘗宮西側の齋庫に納めた。太田主は烏帽子・黄色単(ひとえ)に白張姿、他は烏帽子・白張姿。

- ⑦ 2019年11月12日 御禊(ごけい)の儀、大祓の儀

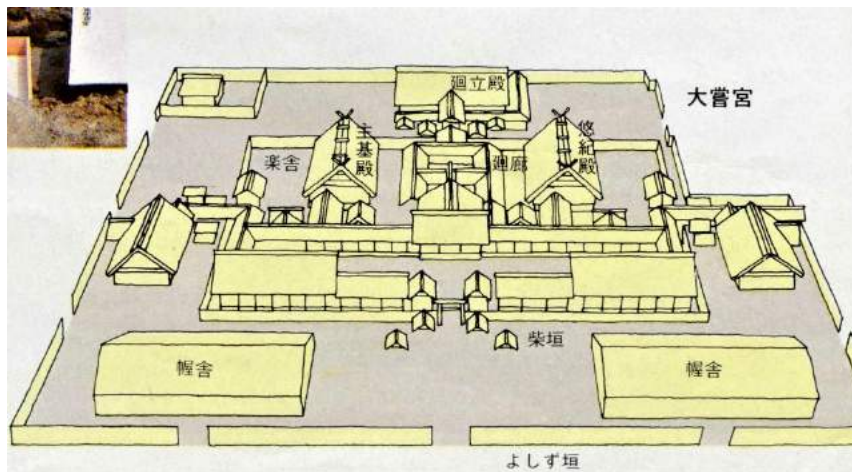
- ⑧ 2019年11月14日・15日 大嘗宮の儀：14日悠忌殿供饌(きょうせん)儀、15日主基殿供饌儀。

・小忌人(おみびと。神事に奉仕する人)<sup>註3</sup>は各自家で沐浴し、齋服に着替えて参集する(『儀式』)。

・この日、大嘗宮の南北の門に盾と戟を立てる(『儀式』)。

### 3. 大嘗宮の造り

宮地を真ん中で二分し、東を悠忌院、西を主基院とする。周りは柴垣で囲む(図1)。



#### 【大嘗宮】

○中垣の南に、奥行5間(約9m) 広さ2間(約3.6m) 柱の高さ1丈(約3m)の正殿2棟(悠忌殿・主基殿)を造る。北の3間は室(神座の置かれる所)。南の2間は堂(采女の座)(『儀式』)(図4)。

○柱は黒木(皮を剥かないままの木)造り。今回は、長野の落

葉松・静岡の杉・北海道のチャダ

図1 平成の時の大嘗宮(1990年)

モノの皮付き丸太を使用。

○屋根は板葺きで、千木(ちぎ)と堅魚木(かつおぎ)を供える(『儀式』では青草葺きとなっているが、今回は板葺きとのこと)。

○壁は草で作り、蓆(むしろ)でその上を覆う(『儀式』)。

○床は平安末期に板敷となったが、『儀式』では土間に束草を敷き、その上に竹製の簀(すのこ)を置き、そ

の上に蓆を敷いている。

<神座>(図4)

- ・室の方に、白縁(へり)の畳 10 枚(異伝では 11 枚)を敷き、その上に坂枕(さかまくら)を置く。畳の敷き方は、『儀式』『延喜式』では不明であるが、平安末期には、室の真ん中に数枚並べ、その中央に八重畳(やえだたみ。畳 8 枚)を置き、上に衾(ふすま。掛け布団)を掛ける形になっている(『江家次第』)。
- ・神座の東に畳 4 枚を敷き、天皇の御座とする。

【廻立殿(かいりゅうでん)】大嘗宮の北に横 5 間の廻立殿を造る。黒木の柱、板葺き屋根(図 1)。

4. 大嘗宮での祭典(『儀式』による)

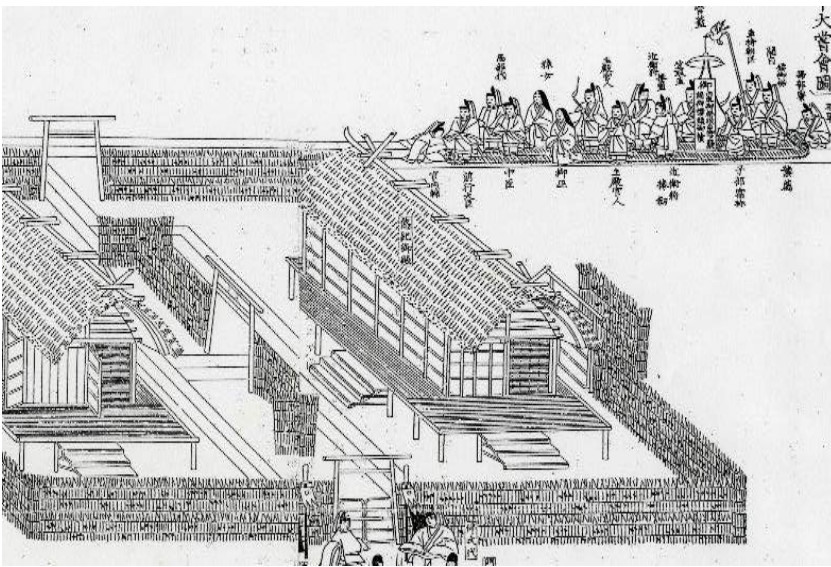


図 2 貞享 4 年(1687)の大嘗宮と渡御図

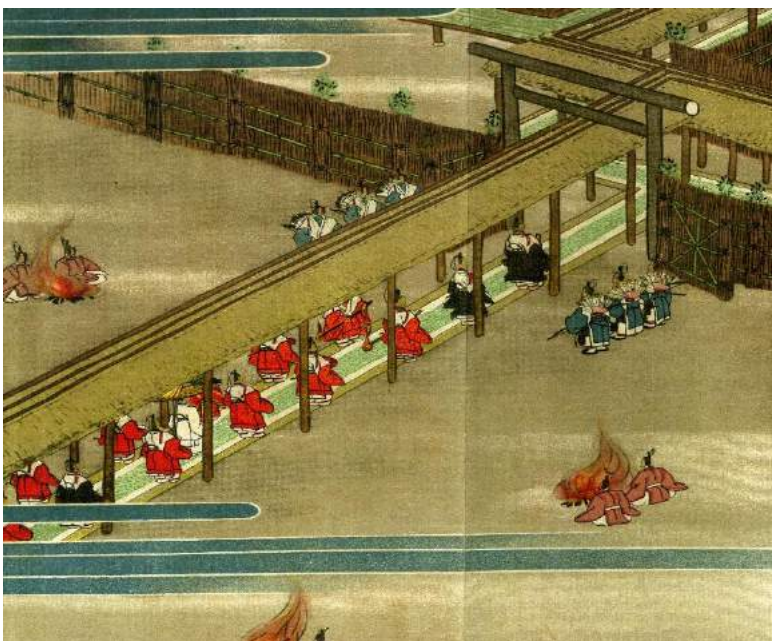


図 3 大正天皇の大嘗宮渡御絵(1915 年)

① 酉刻(午後 6 時頃) - 寮火を悠忌殿・主基殿の燈楼につける。

② 戌刻(午後 10 時頃) - 天皇は廻立殿に御し、浴湯(ゆあみ)し、祭服に着替え、大嘗宮に向かう。

・回廊には予め 2 幅の麻布を敷き、その上に葉薦(はこも。薦の葉で編んだ蓆)を敷き、天皇が通った後から役人が巻いていく(図 2)。

○『儀式』では、2 人が燭をとって道を照らし、重臣 1 人が中臣・忌部、御巫(みかんなぎ。神に仕える童女)・猿

女(さるめ。舞奉仕の女)を率いて先行することとなり、近世まで継承されたが(図 2)、大正天皇の際には、御巫・猿女は先行していない(図 3)。

○役人 1 人が菅(すげ)の蓋(きぬがさ)を持ち、2 人の役人が共に行き蓋の綱をとる。

◆天皇は悠忌殿に入る

悠忌殿での神事(天神の祭り)は、秘儀の為公開されない可能性が大きい。『儀式』『延喜式』にも記されていないので、平安末期の『江家次第』・『兵範記』に基づいて記すこととする。

(1)10 人の采女(うねめ)<sup>註 4</sup>・10 人の小忌人が堂に入る(外陣)。

(2)天皇は御手水を終え、采女の差し出す

中で手を拭く。

(3)8人の采女と神事の役1人は神の食薦(けこも。食卓の下に敷く薦。木綿〔ゆう〕<sup>註5</sup>で作る)を捧げ、最姫(もひめ。最上の采女)は、神の食薦を短畳の右上に敷く。

(4)次に、最姫は天皇の食薦を同じ畳の上に敷く。

(5)次に、采女達は食物を食薦の上に置く。

(6)まず、八葉盤(ひらで。枚手。柏の葉を竹の針でとめ、盃形にしたもの)(図5左)を置く。

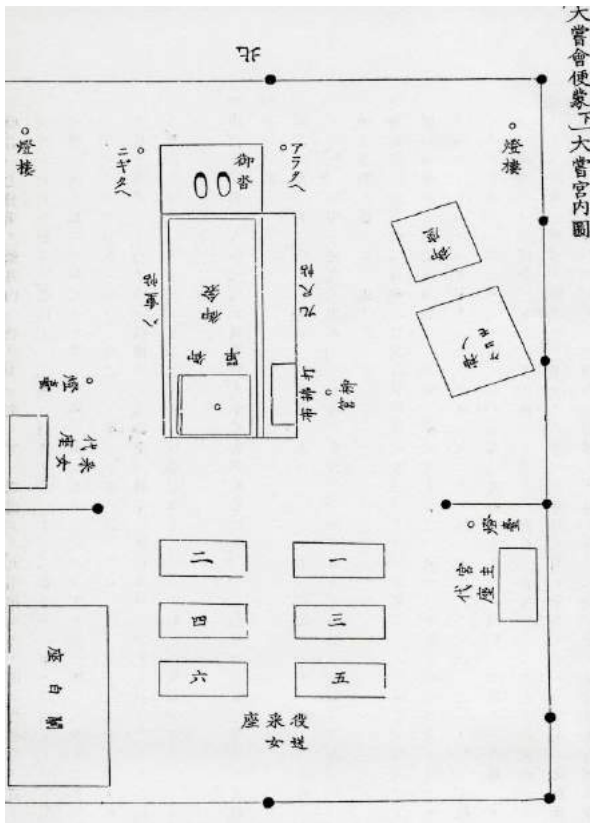
(7)次に、御飯、肴(鮮魚・干物あわせて8種)、菓子(果物)等を窪手(くぼて。柏の葉を竹針でとめ、皿形にしたもの)(図5右)に盛り、羹(あつもの。熱い吸い物。鮑汁か?)は、高坏(たかつき・足付きの器)にすえる。

(8)最姫1人が御前にとどまる。

最姫はまず窪手すべての蓋を取る→御飯・肴・菓子等の上に箸を置く→最姫は葉盤を取って天皇に渡す→天皇は箸で葉盤に御飯をのせ、姫に渡し、姫は食薦に置く。

また、葉盤を天皇に渡す→天皇は肴を盛り、姫に渡し、姫は食薦に置く。

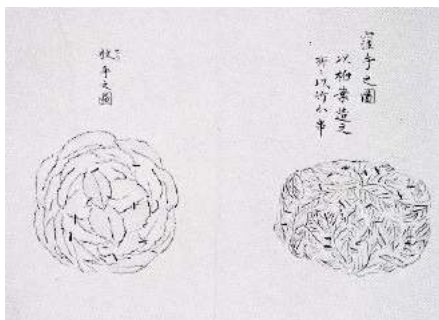
羹・菓子等も同様にする。(10度繰り返す)



(9)次に、最姫は酒を本柏に盛って天皇に供する→天皇はこれを神の食薦に注ぎ、柏を食薦の上に置く。(4度繰り返す)

図4 元文3年(1738)の大嘗宮内部図

り返す)



(10)最姫は箸をとり御飯の上に置く→天皇は頭を低く垂れ、手を拍って箸をとり、御飯を食べる。お酒を供すること8度。

(11)采女達は膳を撤去する→最姫は神の食薦を巻いて退出する。

(12)天皇は御手水を供し、采女・小忌人とともに退出し、廻立殿に帰る。

◆天皇は主基殿に入る。同じ神事(国神の祭り)が繰り返される。

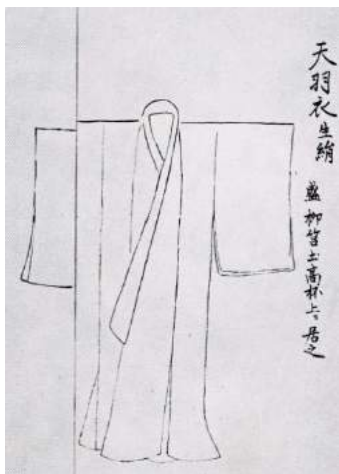
図5 枚手、窪手 貞享4年(1687) 5. 大嘗祭の斎服

【天皇】

A.天羽衣(あめのはごろも)：大嘗祭当日に、天皇が廻立殿に行き、浴湯をする時に着るもの(図6)。仁安3年(1168)の大嘗祭の記録では、「三河の和妙の天羽衣(絹製)」と「阿波の荒妙の天羽衣(麻製)」の2種類がある。1枚を着けて湯に入り、湯の中でこれを脱いで上がり、他の1枚で身体を拭く(『兵範記』)。

B.祭服

○帛衣(はくい。帛袍)：天皇が廻立殿に入る時に着る装束。白の練絹(ねりぎぬ)<sup>註6</sup>製。寸法・製法は全て束帯(そくたい。図10右の男性の装束)と同じ(図7)。



袍(図7の一番表の衣)・半臂(はんぴ。以下単までは下に重ねる衣)・下襲(したかさね)・裃(あこめ)・単(ひとえ)は全て白平練絹製。表袴(うえのはかま)は表白平絹・

図6 天羽衣 貞享4年(1687) 裏薄紅平練絹。大口袴(下袴)も白練平絹。襪(しとうず。くつした)は平絹。帯は



図7 平成の時の御帛衣



図8 天皇の斎服(江戸時代)

無文玉巡方帯(むもんぎょくじゅんぼうたい。文様の無い玉の四角い飾りのついた帯)。

○斎服：大嘗宮に入る時の装束。悠忌殿用・主基殿用と2揃い用意。白生絹(すずし)<sup>註7</sup>製。

仁安3年(1168)の例では、闕腋袍(けってきのほう。脇が開いた袍。図11右)の形で、袍・半臂・下襲は生絹で作り、表袴・大口袴・裃・単等は、帛衣の装束のものを用いている(『兵範記』)。しかしその後、図8のような縫腋袍(ほうえきのほう)で襷(らん。裾につけた横布)に襞(ひだ)を畳む形となり、今日に継承されている。頭には、幘冠(さくかん。白絹で纓〔えい〕と巾子〔こじ〕を結んだ冠)をかぶる(図9)。



図9 御幘冠(江戸後期)

【神官・奉仕者の小忌衣、采女の斎服】

○小忌衣

闕腋袍形と衫(さん)形の2種があり、いずれも麻布に青摺り(あおずり。山藍で摺り染めにする)による文様がついている。肩に赤紐が付く<sup>註8</sup>(図10)。いずれも束帯の上に着用。冠からはヒカゲノカズラ<sup>註9</sup>を下げ、心葉(こころば。金属製の梅の枝)を巾子の前に挿す(図10、11)。

○采女の斎服

貞享4年に大嘗祭が再興された時の采女の装束は、唐衣(からぎぬ)・絵衣(えぎぬ)・緋袴・白小袖・白襪の構成で、一番上に禪(ちはや。千早)を肩から掛けて装うというものであり、今日に継承されている(図12)。

唐衣：藍染め地に白で青海波文を染め出した衣  
 絵衣：雲形(金銀箔摺り)や松・椿などを描いた衣  
 禪：白地に山藍で蝶の文様を青摺りした衣

髪には、「心葉」をつけた釵子(さいし)を簪 3 本で留め、挿櫛(さしぐし)をし、白糸製ヒカゲノカズラ 8 筋を釵子(さいし)につけ、前の左右と後ろの左右に二筋ずつ垂らす(図 10 左の女官の髪飾り)。



図 10 白糸製ヒカゲノカズラに小忌衣姿の女官と  
 蘿を付けた小忌衣姿の小忌人(1915 年)



図 11 ヒカゲノカズラ・心葉に小忌衣(1738 年)

左：衫形の小忌衣 右：闕腋袍形の小忌衣



図 12 采女装束(江戸後期)

### おわりに

令和の大嘗祭は、基本的には平成の大嘗祭を継承したものになるであろう。しかし経費の関係からか、大嘗宮の屋根は茅葺から板葺きへと変化した。平成までの大嘗祭は、江戸前期貞享 4 年(1687)に復興され、元文 3 年(1738)に再興された大嘗祭を継承してきたものと考えられるが、この間も、時代の要請に応じて少しずつその様態が変化してきた可能性はある。とはいえ、先人たちは可能な限り我が国古来の神事の伝統を残そうと努めてきたことも

確かである。先人たちのこの思いを大切にし、

絵衣(左前)・唐衣(後ろの青海波文のもの)  
禪(唐衣の上の白地に蝶文のもの)・緋袴(右前)

これらの伝統行事を未来に伝えてゆくことは  
今日に生きる私たちに課せられた大切な役割  
なのではなかろうか。

## 註

1. 真夜中の神事：日本古代では神は夜動くとしてされており、一般的に神降ろし・神まつり等の神事は夜間に行われた。この風習は今日でも、大嘗祭・新嘗祭を始めとして春日大社御祭り等々全国各地の神社で守り続けられているものでもある。
2. 白酒・黒酒：古代において白は光の色であり、天を象徴する色であった。黒は光の当たった蔭の色で、蔭は地上にできることから、地を象徴する色とされた。よって白酒・黒酒を供するのは、天と地の酒(この世のすべての酒)の意からかと思われる。
3. 小忌：「をいみ(小斎)」のことで「大忌(おほいみ・大斎)」に対するもの。諸説あるが、厳密に斎戒するのが「小斎(小忌)」で、大まかに斎戒するのが「大斎(大忌)」というのが有力。
4. 采女：古くは大王(おおきみ)などに奉仕する女性であったが、平安時代には神事や節会に奉仕する女官の呼称となっている。
5. 木綿：モメンではない。楮の白い内皮を帯状にしたものや細く割いて糸状にしたものなどがある。
6. 練絹：繭から引いた糸はセリシン(タンパク質)に包まれていて硬いが、練る(灰汁等のアルカリ溶液で煮る)ことによりセリシンが溶け出し、柔らかい糸になる。この練糸で織ったのが練絹。
7. 生絹：セリシンに包まれたままの固い糸で織った絹織物。
8. 赤紐のついた青摺りの小忌衣：これは、『古事記』仁徳天皇条・雄略天皇条(5世紀後半)にみえる「赤紐つけし青摺り衣」と関わるものと考えられるが、この「衣」は『日本書紀』には全く登場しない。また『古事記』の記述は、編纂時に挿入された可能性がうかがえるものでもある。よって、『古事記』編纂の頃(8世紀頃)から神事服として用いられるようになった衣なのではなかろうか。宝亀元年(770)に催された歌壇の際に、参加男女 230 人全員が「赤紐つけし青摺り衣」を着たと『続日本紀』は記している。
9. ヒカゲノカズラ：神降ろし具の一つ。本来は蔓性の常緑植物である蘿を頭周りに巻いたが、平安末には青糸を組んだ人造物になった。近世以降は、身分の高いものは白糸製、下の者は緑糸製となる。

## 〔参考文献〕

『儀式』故実叢書、明治図書 1954。『延喜式』国史大系、吉川弘文館 1964。『江家次第』故実叢書、明治図書 1953。『兵範記』増補史料大成、臨川書店 1995。『古事類苑 神祇部一』吉川弘文館 1981。今泉定介『冠帽図絵』1840(故実叢書 1899)。『御大礼画報』大阪朝日新聞社 1915。田中初夫『踐祚大嘗祭 研究編・資料編』木耳社 1975。別冊歴史読本『図説天皇の即位礼と大嘗祭』新人物往来社 1988。毎日グラフ緊急増刊『平成即位の礼』毎日新聞社 1990。吉野裕子『大嘗祭 天皇即位式の構造』弘文堂 1987。増田美子『古代服飾の研究—縄文から奈良時代—』源流社 1995。仙石宗久『十二単のはなし』婦女界出版社 1996。京都国立博物館編『天皇陛下在位十年記念 宮廷の装束』高倉文化研究所 1999。

## 〔図版出典一覧〕

図 1：毎日グラフ緊急増刊『平成即位の礼』毎日新聞社 1990。 図 2：「大嘗會之図」1687(『古事類苑』神祇部一)。 図 3：『御大礼画報』大阪朝日新聞社 1915。 図 4：「大嘗會便蒙」1739 刊(『古事類苑』神祇部一)。

図5:「大嘗會之図」1687(田中初夫『踐祚大嘗祭 資料編』木耳社)。 図6:「大嘗會之図」1687(田中初夫『踐祚大嘗祭 資料編』木耳社)。 図7:毎日グラフ緊急増刊『平成即位の礼』毎日新聞社 1990。 図8:京都国  
立博物館編『天皇陛下在位十年記念 宮廷の装束』高倉文化研究所 1999。 図9:今泉定介『冠帽図絵』1840(故実叢書、明治図書)。 図10:『御大礼画報』大阪朝日新聞社 1915。 図11:「大嘗會便蒙」1739刊(『古事類苑』神祇部一)。 図12:仙石宗久『十二単のはなし』婦女界出版社 1996。